

船が岸に近寄ってきた、

『虚無』の海に出航するという。

誰がこの船に乗ろうとするか。

長い参道の両側に並ぶ土産店を抜けて石段を上りつめると境内の広場に出る。広場の向こうに本堂の正面が迎えてくれるようにこちらを向いている。松林に囲まれて暑い真昼時の境内は、白々として蝉の声ばかりだ。一人の男の人が本堂前で、やや前かがみに立っている。足元に小さい汚れた旅行鞆が置かれているのを見ると、遠くから来たらしい。中年すぎの実直そうな洋服姿である。僕もその側に進んで行って瞑目合掌。男の人はさつきから願い事をしていられない。声は細く低い、粘り強い針金のように途切れなく聞こえてくる。どうやら九州辺りから商用でもあつて関西に来ての、僕と同じような道寄りらしい。

留守宅の家族の者が流行風邪に罹りませぬように、事業も順調で平和に暮せますように、自分も丈夫で途中で倒れ

たりする事のないように、何卒お護り下さいませ様にと、種々様々の内容を含めた願い事が、くりかえしくりかえし、熱心に祈りつづけられている。特に自動車事故で入院中の子供の手術の経過については将来に何の障害を残さないようにというところでは、一段と声が弾み力がこもってくるのである。

関西地方は古来文化の先進地であつただけに、庶民の栄枯盛衰興亡浮沈の激しい所でもあつたのを反映してか、現在四通八達した郊外電車の殆ど各駅毎にと言つてよいほど、何々寺、何々神社、何々薬師、何々厄神様等と有り難いご祈禱ご利益を授受するという立て札や案内標が立て並べられている。もし僕のように地方から出て来た一老人が、正直にその駅々に下車して参詣するとなれば、それだけでも結構一年間の旅程は充たされてしまうであろうと思いたくなる。願い事の受付所は例えば山上の奥の院に上る山腹の曲折した道側に小さい祇幟が無数に林立している事務所だけではない。商売繁盛病氣平癒無事出産の文字は昔ながらであるが、近頃は「自動車安全」から「受験合格」の文字まで書かれている。よくみると志望校名を書いて十八才と

ある。本来はその宗派のお題目が書かれたものだが、現在の生き甲斐を現すお題目は「受験校名」となったわけであるか。

話は前に戻るが、本堂前で祈っている男の人の態度の真摯さに打たれて聞くとともに耳に入ってくる言葉にふと不思議な気がした。「お願い致します。どうぞお助け下さい。お願い致します」と声涙相伴わんばかりの言葉の中に、時々「有り難うございます」「有り難うございます」というのが混じってくるのである。願い事をしている最中、願い事はまだ叶えられてはいないはずだし、将して受納されるかどうかとも判らない段階、「有り難うございます」という言葉が出されるといふことはどういうことであろうか。

苦しい時の神頼みは人情の常、一生懸命に先方を拝み頼んでいる内に、何時の間にか、その「願い」が既に叶えられたかのような錯覚に陥ってしまうのだろうか。もし感謝の先取りというのならば、願えば必ず聞き届けられるという絶対の確信が前提になり、願うことが即叶えられるということなのか。そうすると「願う」こと自体が無意味になるのではなからうか。現世の欲張った願い エゴの塊

そのものが、エゴそのものを突き抜けて一気に神仏に直接する忘我の瞬間、自己陶醉の極が自己超越を現成するとも言うのだろうか。

「有り難い」、こちら側に有ることが難しい。つまり無いこと、その無いことが向こうの方から眼前に有ることへの、現在感からの驚き、感激、感謝。

事実彼は如何にも感に堪えぬように「有り難うございます」と言う度に、お堂の中のご本体が眼の前に出てこられたのか、慌てて腰を曲げて頭を深く下げるのである。そしてまた我にかえって先の願い言をくりかえしているのである。

死ぬことが怖い。その年をして何を今更と笑われるかも知れぬが、僕なりにこの年になってのホンネを吐かせて貰いたいのだ。

もう相当くたぶれてしまっている自分に「死にたくない」と反発して生に執着する程の積極性は維持しえないにしても、老いの果てが恐ろしいということはどうともならぬのである。

前途に広がる「虚無」は思うだに怖ろしい。それは尚「思われた虚無」にすぎないといわれなければならないその「虚無」への怖ろしさ。「永遠」に怖ろしい、その「永遠」を呑み込んでしまう「永遠そのもの」。本当に何も無い、神も無い、絶対も無い、ということすらも成り立たない「無」に成らなければならない、直面しようもないものに直面しなければならぬという怖ろしさ。

ここ数年来、次第にそんな思いにとりつかれていた折柄、昨夏の旅宿で、たまたま唐木順三さんの「続あづまみちのく」を手にした。奥の細道を辿り難儀の日を重ねて、最上川に「五月雨の流れも疾し」の句を残した越後路に辿り入った芭蕉のそれまでの内的苦悩が日本海に直面して、「荒海や佐渡に横たう天の川」の句を生んだのだと言う。僕は深いショックを受けた。その時の芭蕉は「風雅などという人間の営為が吹きとんでしまうような永劫回帰を眼前の一瞬に感じたであろう」と推察して、この「日本海体験」がこれ以後の芭蕉の芸術に潜在的に重要な意味をもつと断じているのもうなずかれることである。

その夜僕は夢を見る。濁浪の海に流されて行くのである。

激しい潮の大きなうねりに乗せられた体は一上一下されながら、それが何か後ろからの力で押されているように押し流されて行く。誰もいない、何も無い、波の音もない無音の世界だ。眼に映る限り茫々として重苦しい浪又浪それが又是非共急がねばならぬように競りあつて先へ先へと流れこんで行くだけである。継る所もない、把むものもない、それにもう二度と還ることが（どこへかはわからない）出来ないのだという絶望感が急に湧いて来る。見えないう空のあたりからのほの明るさに灰色の波の肌が生温く光っているばかりだ。「孤独」だ、「救いは無い」。声にならない声を挙げたのは、夢の中だったのか、夢の後だったのかわからない。

夢が遠のいて行くにつれて、日頃の何か重苦しいものが次第に体中から脱け落ちて行くのを覚えて目が覚めると、何か別の自分がここに居るような気がした。

無始無終 宿業の 永劫流転・・・

バスの停留所では、今日も、殆どの人がバスの来る方に頭を向け体を向けて立っている。

一人位はそうでない一人があっても良さそうに思える
がバスの来る方に背を向けないまでも！

昭和五十二年三月二十八日 記す